

# 小

# University of Fukui Hospital



# 坂

# 浩

## 脳と心を読む、 精神疾患患者の通訳者

### 精神疾患全領域を網羅する 診療体制

世界保健機関（WHO）は、障害調整生存年（理想的な寿命と比べ、障害や早死で失われた年数。疾患負荷の大きさを示す）で評価すると、2030年に精神疾患が第1位になるという予測を発表した。同じくWHOは、新型コロナウイルス感染症が発生した最初の1年間に、不安症とうつ病の有病率が世界で25%という驚異的な増加を示したと報告している。

福井県でも、認知症患者の増加、ならびにストレス社会を反映したうつ病や適応障害が増えている。昨今、精神科外来の敷居が低くなったこともあり、患者数は増す一方だ。

福井大学医学部附属病院の神経科精神科では、自閉スペクトラム症や注意欠如多動症などの神経発達症、拒食症や過食症など摂食障害、統合失調症、うつ病や躁うつ病など気分障害、パニック障害や強迫性障害など不安に関連した疾患、不眠

**Hiroataka  
Kosaka**

**neo**  
MEDICAL INFORMATION MAGAZINE



**大学病院として高度医療、  
医師育成、摂食障害支援に  
あたる**

特定機能病院の診療科としての役割も多々ある。高度医療では、麻酔科蘇生科との連携により、うつ病や統合失調症などの重症症例に対する電気けいれん療法を、また、終夜睡眠ポリグラフィ専用個室睡眠検査による短期入院治療、認知症の脳画像による精査な検査も行う。福井大学高エネルギー医学研究センターにある高精度なPET/MRは、脳の形、体積、脳内神経線維の構造などの分析が可能で、脳画像研究を行う小坂教授らの強みとなっている。

人材育成に関しては、日本精神神経学会専門医研修施設、日本総合病院精神医学会専門医研修施設に指定されている。また、子どものこころ診療部や小児科と協働し、児童精神医学領域のサブスペシャリティ専門医である、子どものこころ専門医研修施設群の基幹施設も務めている。

「精神科医の業務が以前に比べて拡大し、現状、マンパワーが足りません。当院は県下唯一の大学病院として、精神科専門研修プログラムで若い精神科医を育成し、地域精神医



症、てんかんなど発作性疾患、認知症など精神疾患全領域を診療する。また、GENERAL HOSPITAL PSYCHIATRYという診療体制を整えている。

「児童精神医学に精通する医師も増えましたので、未成年を特化的に診る『子どものこころ診療部』と協働し、児童精神疾患の外来や入院も積極的に受け入れています。全国でも児童の精神疾患を診療できる大学病院は少なく、多種多様な児童精神疾患に対応できる点は当院の特徴です」小坂教授はこのように説明する。

他診療科と連携したチーム医療にも積極的だ。多職種による緩和ケアチームではがん患者に対する全人的治療への参画、認知症ケアチームでは認知症患者が身体疾患の治療を円滑に受けられるようサポートや院内デイケアを担当。リエゾンチームは、メンタルサポートを必要とする身体疾患患者に対し、定期的に身体科病棟ラウンドを行いつつ、主治医と連携しケアおよび治療を行う。外科医、管理栄養士、薬剤師らで構成される栄養サポートチームからの助言を受けながら、摂食障害の患者や低栄養でフレイル状態の高齢者患者に栄養療法を行う。



療を支えていく使命があります。従来の領域だけでなく、新しい領域も受け持てる精神科医の育成をしていきたい。たとえば、不登校、神経発達症、被虐待、トラウマ、摂食障害です」

令和5年には、福井県から厚労省事業の「摂食障害がい支援拠点病院」の指定を受けた。摂食障害がい支援拠点病院がある県は全国に5県、福井県は6番目となる。

摂食障害がい患者はこれまで、20代の女性に多かったが、最近は10才ぐらいから中学生と低年齢化し、これはSNSやコロナ禍の影響が大きいという。ダイエットや筋トレに熱中する、感染症の恐怖から安全を保証された食品しか口にしない、外出できずゲーム三昧で食事を摂らないなど、様々な原因から摂食障害を来す児童や青年が増えている。

「勉強も部活もトップに」とがんばる子がトップを取れなくなり、「私はほかになんかできるのか」という考えからダイエットに走るといふ症例が相当数あります。体重が激減すると脳は萎縮し、正常な思考ができなくなるため、何を言っても受け入れません。たとえば、「自分の体型はどれ？」という十折のテストをする

と、痩せ細った実際の自分とはかけ離れた体型を選ぶ。治療はまず、高カロリー食で体重を増やし、思考のできる身体に戻します」

### 脳について学んでから心を探求せよ

小坂教授の専門は、疾患では神経発達症や摂食障害、研究方法では脳画像によるアプローチ、対象年齢層は児童青年精神医学領域である。最近、大人の自閉スペクトラム症（以下ASD）がクローズアップされるようになったが、教授はその分野のスペシャリスト。ASDは、社会性に乏しくコミュニケーションが困難、行動や興味の偏りやこだわりが強い、聴覚過敏や触覚探究がある、などを特徴とする。親密なつきあいが苦手、冗談やたとえ話がわからず言葉そのまますべて受け取る、会話が一方的、急な予定変更で混乱する、融通がきかないといったことが指摘される。日常生活、家庭、職場で生きづらさを感じ、なかにはうつ病などの精神的な不調を抱える人もいる。

「ASDの人に対しては、まず、周囲の人がASDについて理解することです。また、納得が行くように

説明をすれば、それが動機付けとなり、たとえば予定外の仕事も引き受けてくれます。さらに大切なのは構造化。テリトリーを決めることです。たとえば、使用するデスクの範囲や仕事の範囲などをきちんと伝えます。こうした工夫や配慮を積み重ねれば、ASDの人でも居場所ができます。不必要な薬剤の投与を減らすこともできます。ただ、こうした概念は医療者の間でもあまり知られていない。ですから、私は講演などでお話ししています」

ASDの病態に関しては、脳画像法を用いた脳の形態や脳機能の分析、また、感覚過敏と関連する脳構造を研究している。「脳に原因があるから自分はASDなのだ」とわかれば、本人も家族も抵抗なく受け入れられるケースもある、と教授は見ている。

「精神科医が診るのは「脳」と「心」です。私は、MRIや脳波などの検査では脳の状態を意識しますが、同時に患者さんの心に耳を傾けるようなアプローチをします。「脳」と「心」の両面を理解することこそ、精神科医の精神科医たる所以。脳のネットワークや機能など「脳」について学んでから「心」を探求しなさい。初

代教授の伊崎公德先生からそのよう  
にご指導いただきました」

「医局員には研究ががんばって  
ただきたいですが、自己満足に終  
わってほしくありません。常に患者さ  
んにフィードバックできる研究かど  
うかを意識し、研究成果を患者さん  
との臨床場面に還元してほしい」

### 患者の味方になるため 精神科医に

小坂教授は、医学生時代の病院実  
習で精神疾患患者と初めて出会う。  
うつ病か統合失調症か、話をするど  
ころか見向きもしない。後日、その  
人が「あのときは失礼な態度をして  
ごめんなさい」と言う。大勢で出向  
いた中の一人なのに、覚えてくれて  
いた。なにか胸に響くものを感じ  
た。やがて精神医学の道に進む。そ  
れはなぜなのか。

「精神疾患を患っている人の味方  
になりたかった。治したいというよ  
り応援したいと。精神疾患・障害に  
苦しみ、ときに再発し、社会参加が  
できずにいる。世間の人から偏見を  
持たれたり、家庭でも孤立感を感じ  
たりしている人たちの味方になりた  
かった。精神疾患を誤解している社

会の方々に正しい知識と対応法を伝  
えたかった。そんな想いです。自分  
が精神科医になるしかないという使  
命感と言いますか、導かれているよ  
うな、心惹かれていくような。今も  
その感覚は変わりません。天職だと  
思っています。生まれ変わっても精  
神科医になりたい」

社会には精神疾患患者に対する偏  
見だけでなく、「精神疾患は治らな  
い」という誤った認識を持つ人も少  
なからずいる。しかし、教授が医師  
になった25年前と比べ、薬剤や電気  
治療の進歩により精神疾患の治療効  
果は劇的に良くなっている。脳画像  
研究や遺伝学的研究が進展し、原因  
不明だった精神神経疾患の病態解明  
が進んでいる。これまで気付かれな  
かった神経発達症やトラウマ性疾患  
も、診断基準の整理に伴い、明確に  
なっている。こうした精神医学の潮  
流を鑑み、教授は医局員にこう望む。

「ある分野の専門性を高める前に、  
すべての精神医学領域を学び続け  
ほしいです。立ち止まってもらえな  
い、日々勉強です。常に鑑別診断に  
取り組みながら、多くのアプローチ  
を学んでほしい。常に新しい情報を  
吸収して、目の前の患者さんに還  
元していただきたいです」「患者さ

んに対し、共感して一緒におつきあ  
いしていくという意識を持ってほし  
い。同じ方向を見て寄り添って行く  
伴走者であってほしいと思います」

### 言葉にならない心の声を通訳

「精神科医は患者さんの味方」と  
いう信念は小坂教授の原点。たとえ  
ば、患者が「やってはいけないこと」  
をしても、説教をしたり叱ったりし  
ない。その行為の理由を探る。つら  
い心のうちを代弁する。

患者さんが自己表現・言語化が十  
分にできないので、それを理解する。  
家族や周囲の方々に、患者さんの想  
いを説明する。そのようにして、患  
者さんと家族・学校・職場・社会の  
間に「通じない溝」ができていたの  
を埋めたい、「通訳」役になって、  
お互いに理解しあえるようになって  
ほしい。

福井大学医学部附属病院神経科精  
神科の医局には、小坂教授の啓発活  
動に喚起された若手医師が、「先生  
のような精神科医になりたい」とい  
う志を抱いて全国各地からやってく  
る。彼ら小坂ジュニアが、福井、な  
いし日本の精神医学の次代を背負っ  
ていく。



小坂 浩隆 (こさか ひろたか)

福井大学医学部附属病院 神経科精神科 教授

【略歴】

- 1993年 福井医科大学医学部卒業、  
福井医科大学医学部精神医学教室入局
- 2004年 福井医科大学大学院修了
- 2004年 福井県立病院こころの医療センター心身医療科 科長
- 2005年 福井大学医学部精神医学講座 助手・助教
- 2012年 福井大学子どもこころの発達研究センター 特命准教授
- 2014年 同 特命教授
- 2016年 同 教授
- 2018年 福井大学医学部精神医学講座 教授